

SMAART

Saga Mobile Academy of ART 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート

2018 記録集



SMAART

Saga Mobile Academy of ART 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート

2018 記録集

目次

ごあいさつ	3
SMAART事業イメージ	4
SMAARTブラッシュアップ応用編について/2018年度スケジュール	6
アートマネジメント・セミナー ブラッシュアップ編	9
アートプロジェクトの作り方	10
はじめての文化政策-誰のためのアート?-	11
アート&サイエンスを生かした価値創造プラットフォーム戦略<ヨーロッパ編>	12
芸術・文化の薫るまちづくり<カナダ編>	13
芸術・文化の薫るまちづくり<ヨーロッパ編>	14
現代アートと法律	15
アートプロジェクトと教育-人々とアートをつなぐために	16
受講生の構成/受講生の声	17
〇〇 小坂智子	18
アートスペース見学	19
GALLERY SOAP	20
サナトリウム	21
art space tetra	22
HAMASHUKU KURABITO	23
アートスペース 糺	24
アートスペースとアートカフェ 西島博樹	25
2018年度の始まり 事務局	26
フォーラム 「茶・藝・道-売茶翁と現代ストリート文化-」	27
参加者の構成/参加者の声	32
雨男Sの役割とは 事務局	34
アーティスト・イン・レジデンス SMAART AIR ウォーム・アップ	35
活動記録	36
サポーターの構成/声	39
《side by side》1日目	40
《side by side》2日目	42
作品「side by side」についてオレクトロニカ	44
アートプロジェクトの余白と芸術体験の時差 花田伸一	45
マネジメントとは~事務局の思い~ 事務局	46
ポータルサイト編集部ミーティング	47
「potari」広報資料	51
編集部員の構成/編集部員の声	52
アート情報で地域の人びとをつなぐ potariについての覚え書き 杉本達應	53
この度も大変お世話になりました 事務局	54
資料	56
メディア掲載一覧	57
講師プロフィール	58

ごあいさつ

「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート」[Saga Mobile Academy of ART 略称:SMAART]は、佐賀および周辺地域のアートマネジメント人材の育成を目指すプロジェクトで、「文化庁 大学における文化芸術推進事業」として取り組まれるものです。

本プロジェクトでは地域の方々を対象に2017年度から3年間にわたってセミナーと実践的な活動を展開するとともに、地域の文化芸術に関する情報や人材が集まるネットワークづくりを目指しています。

2017年度には「スタートアップ入門編」、2018年度には「ブラッシュアップ応用編」として、佐賀県内のやきもの・食・観光・歴史に関する地域資源を再発見するセミナーやアートマネジメントの基本を学ぶセミナーを開講しました。また県内の文化芸術情報を発信するWEBサイト構築に取り組みつつ、実験的にアートカフェやアーティスト・イン・レジデンスの企画体験をしながら、アートを通じて人々が交流する「アートカフェ」実現に向け、その可能性を受講生の方々と模索していきます。

2019年度は「プラクティス実践編」として、前年度までの成果をふまえつつ、招聘アーティスト・受講生・地域住民とともに、江戸期に「茶」を通じて人々に禅の教えを説いた佐賀県ゆかりの禅僧「売茶翁」にちなんだアートプロジェクトに取り組みます。

本書はSMAARTの2018年度の活動についての記録です。「芸術で地域を拓き、芸術で世界を拓く」をモットーに開設された佐賀大学芸術地域デザイン学部によって企画運営される本プロジェクト、その“ブラッシュアップ”の記録をどうぞご覧ください。

2019年3月

佐賀大学芸術地域デザイン学部

文化庁 大学における文化芸術推進事業



佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート
Saga Mobile Academy of ART

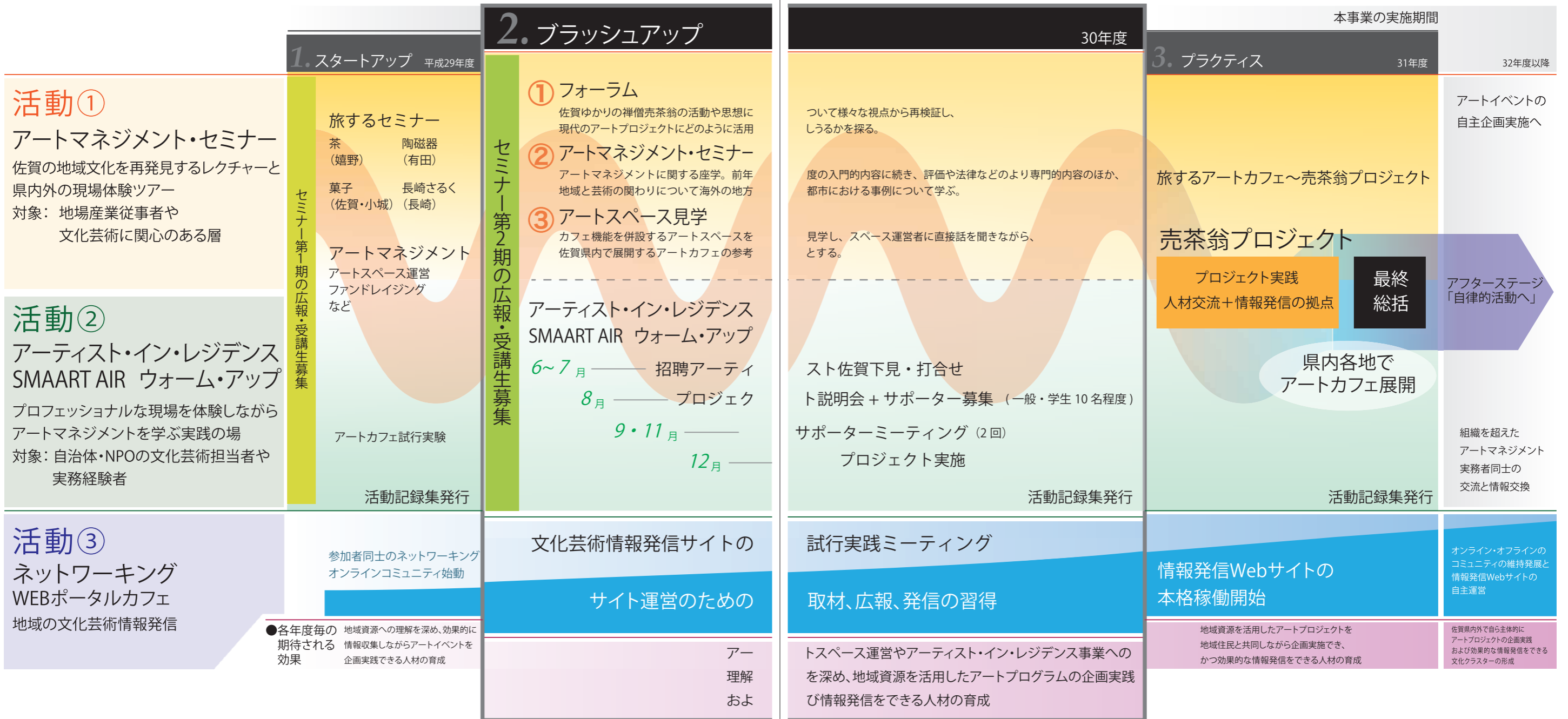
芸術を
佐賀の地域

SMAART
基本コンセプト

1. 新設の芸術地域デザイン学部の専門性を活かし、佐賀の地域文化を新
2. 佐賀の地域文化とアーティスト・イン・レジデンスを組み合わせた「旅する
3. 地域の人材交流と情報発信を促進するために、参加者のネットワーキン

通じた地域創生人材の育成
資源をめぐるアートカフェとネットワークづくり

たな視点で発見・発掘しながら、芸術を通じた地域創生人材を育成する。
アートカフェ」を企画・実践する。
グと、文化芸術情報発信のオンラインプラットフォームの構築と運営をおこなう。






SMAARTブラッシュアップ応用編について

SMAART初年度の2017年度「スタートアップ入門編」においては、アートマネジメントに関する講座や見学などのインプット重視のプログラムがメインであった。

続く2018年度「ブラッシュアップ応用編」においては、この図表に示される5つのプログラムを通して、知識の習得だけでなく、体験や実践の機会をより多く設けながら、最終年度の2019年度「プラクティス実践編」に向けてのウォーミングアップを図った。

2018年度スケジュール

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
 アートマネジメント・セミナー ブラッシュアップ編	6月30日(土) 講師:森司 「アートプロジェクトの作り方」	7月28日(土) 講師:山下里加 「はじめての文化政策 —誰のためのアート?—」		9月1日(土) 講師:鷺尾和彦 「アート&サイエンスを 生かした価値創造プラットフォーム戦略<ヨーロッパ編>」	10月27日(土) 講師:作田知樹「現代アートと法律」		12月8日(土) 講師:端山聡子 「アートプロジェクトと教育 —人々とアートをつなぐために」
 アートスペース見学		7月14日(土) GALLERY SOAP(福岡・小倉)	8月11日(土) サナトリウム(福岡・天神)	9月29日(土) art space tetra(福岡・博多)	10月13日(土) HAMASHUKU KURABITO (佐賀・鹿島)	11月10日(土) アートスペース貌(福岡・天神)	
 フォーラム 「茶・藝・道 —売茶翁と現代ストリート文化—」			8月18日(土) 錦織亮介「黄檗宗と美術」 狩野博幸「美術史における売茶翁の足跡」 木村勝彦「禅の教えと茶の哲学」 毛利嘉孝「ストリーートの表現者たち」 オレクトロニカ「日常にアートを探る」				
 アーティスト・イン・レジデンス SMAART AIR ウォーム・アップ	6月26日(火)・27日(水) 「現地リサーチ」 招聘アーティスト:オレクトロニカ	7月12日(木) 「関係者ミーティング」	8月19日(日) 「サポーター募集・プロジェクト説明会」	9月6日(木) 「サポーター・ミーティング①」		11月15日(木) 「サポーター・ミーティング②」	12月15日(土)・16日(日) 「プロジェクト実施」
 ポータルサイト編集部 ミーティング	6月29日(金) 講師:笠井優 「アート情報サイトの編集」	7月20日(金) 講師:牛島清豪 「地域における情報発信」		9月28日(金) 講師:杉本達應 「ポータルサイトの仕組み」	10月5日(金)・10月19日(金)・11月2日(金) 講師:高橋聡太「記事執筆実践トレーニング」		



SMAART

アートマネジメント・セミナー
ブラッシュアップ編



2018

6 / 30 [Sat]

アートプロジェクトの作り方
講師: 森司

7 / 28 [Sat]

はじめての文化政策
—誰のためのアート?—
講師: 山下里加

9 / 1 [Sat]

アート&サイエンスを生かした
価値創造プラットフォーム戦略
(ヨーロッパ編)
講師: 鷺尾和彦

9 / 15 [Sat]

<有田町民公開講座>
芸術・文化の薫るまちづくり
(カナダ編)
講師: 菊池一夫
芸術・文化の薫るまちづくり
(ヨーロッパ編)
講師: 佐々木保幸

10 / 27 [Sat]

現代アートと法律
講師: 作田知樹

12 / 8 [Sat]

アートプロジェクトと教育
—人々とアートをつなぐために
講師: 端山聡子

2018

6 [Sat] 30

14:00~16:00

アートプロジェクトの作り方

講師:森司(アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長)
会場:佐賀大学本庄キャンパス 理工学部大学院棟 401講義室
出席者数:46名



これまで数多くのアートプロジェクトの企画運営を手掛けてきた森司氏のレクチャー。冒頭、アートプロジェクトに関わるということは大きなことではなく、それぞれの日常を変え、市民参画の基礎を作り上げるアートの可能性にむきあうことであることを説明され、受講生に対して、高く見えるアートプロジェクト参加へのハードルを日常レベルまで下げるところから始まった。「企画」とは作るものではなく「立てる」ものである、と森氏は説く。「立てる」とは、寝ているものを起こすこと、だからこそ、初動で力がある。さらに、集中力と形にする意思がないと横滑りしてしまう。では、横滑りせずに、成功に導くためにはどうすればいいのか。大事なことのひとつとして、プロジェクト内で「共通言語を持つ」ことが強調された。

また、アートプロジェクトには、始まりがあれば終わりがあること、終わり方を考えることも重要であることが説明された。昨年度のスタート時に行われた森氏のレクチャーを踏まえつつ、企画を進めながら着地点となる最終年度を見据えていくことを示す内容は、本年度のスタートにふさわしいものとなった。(小坂)



2018

7 [Sat] 28

14:00~16:00

はじめての文化政策 - 誰のためのアート? -

講師:山下里加(京都造形芸術大学アートプロデュース学科教授、アートジャーナリスト)
会場:佐賀大学本庄キャンパス 教養教育2号館 2201講義室
出席者数:38名



一般情報誌の美術ライター、各地域の文化芸術活動を紹介する雑誌『地域創造』記者、各自治体の文化関連委員としての経験をふまえ、様々な現場を知る山下氏による文化政策レクチャー。まずは大阪府の文楽やオーケストラなどの文化団体に対する補助金削減をめぐる議論から、市場経済と文化政策の関わりについて問題提起。つづいて人口減少・都心部集中・地方空洞化の問題に対して文化芸術の力で地方に活力を生み出す事例として徳島県名西郡神山町のアーティスト・イン・レジデンスの取り組みが紹介された。さらに金沢や横浜の創造都市事業から、大阪・北加賀屋や横浜・黄金町などにみる文化芸術による社会的排除/包摂の論点もふまえつつ、日本センチュリー交響楽団(大阪府)の取り組みをはじめ全国で展開される地域アートプロジェクトの「社会に作用する力」についての整理がなされた。情報の量・質ともに充実のレクチャーであった。(花田)



2018

9

[Sat]

1

14:00~16:00

アート&サイエンスを生かした 価値創造プラットフォーム戦略<ヨーロッパ編>

講師: 鷺尾和彦(株式会社博報堂クリエイティブ・プロデューサー、「生活圏2050」プロジェクトリーダー)
会場: 佐賀大学本庄キャンパス 芸術地域デザイン学部1号館 A101講義室
出席者数: 20名



鷺尾和彦さんによるレクチャーは、オーストリアの地方都市・リンツ市での取材をベースにした文化的な都市再生がテーマだ。

リンツ市は人口約20万人の中規模都市。かつて鉄鋼業が盛んな工業都市として発展したが、現在は文化産業の都市へと変貌した。その転機のひとつが、アルスエレクトロニカ・フェスティバルだ。1979年に市民が主体的にはじめた芸術祭で、いまや世界的に知られている。芸術祭を運営するのは、リンツ市の公営企業であるアルスエレクトロニカ社。同社は、芸術祭だけでなく市民向けの文化・教育サービスを数多く提供し、一部で事業化も果たしている。

リンツ市は、公害や移民など社会的課題が山積するまちから文化産業都市へとイメージの転換を図ることができた。しかし単なる成功事例の話ではなく、確固とした文化政策やビジョンという根本のコンセプトの重要性が示された。受講生それぞれが、わがまちの将来を切実にかんがえる講座となった。(杉本)

参考文献
鷺尾和彦・アルスエレクトロニカ・博報堂、2017、「アルスエレクトロニカの挑戦:なぜオーストリアの地方都市で行われるアートフェスティバルに、世界中から人々が集まるのか」学芸出版社。

2018

9

[Sat]

15

14:00~16:00

<有田町民公開講座>

芸術・文化の薫るまちづくり<カナダ編>

講師: 菊池一夫(明治大学商学部教授)
会場: 佐賀大学有田キャンパス プロジェクトルーム
出席者数: 44名(内 一般参加者18名)



カナダは、世界で二番目の国土の広さを持ち、北極を望む北国です。マイケルJ.フォックスやセリヌ・ディオンはカナダ出身の著名な芸能人です。

本講義では、カナダの歴史を語るうえで、アメリカからどのように独立を保ち、自国のアイデンティティを保つのが文化・芸術政策に表れている点を強調しました。

まずカナダの歴史の概略ですが、ここではイギリスから独立するプロセスと、フランスの影響を受けているケベックとの共存をどのようにはかっていったのか、また多言語政策について考察しました。それに加えて、現在の政治体制(議院内閣制など)や、天然資源に依存する経済システムについて、次にカナダの文化政策について説明を行いました。具体的には自国の文化を育成、保護するシステムを解説しました。

そしてカナダのまちづくりについて、カナダの研究者の間で議論されている持続的なまちづくりや環境問題に配慮する視点などについて紹介しました。(菊池)



14:00~16:00

〈有田町民公開講座〉

芸術・文化の薫るまちづくり〈ヨーロッパ編〉

講師:佐々木保幸(関西大学経済学部教授)

会場:佐賀大学有田キャンパス プロジェクトルーム

出席者数:44名(内 一般参加者18名)



フランスでは、ナントを中心に芸術や文化を生かしたまちづくりが進められています。それらは「創造都市」と呼ばれ、日本でも金沢をはじめいくつかの都市で、「創造都市」が志向されています。文化とは、芸術や文学のみならずライフスタイルや価値観を含むものです。それゆえ、わが国でも多様な芸術・文化は経済的波及効果も大きく、近年の産業政策に組み込まれ、注目を集めています。

フランスでは、文化省に支えられて「文化活動は一般の利益に資するものであり、国や自治体などの公的機関が支援すべきものである」という認識が定着しています。国や自治体は、実際に芸術・文化政策を進める「専門家」を雇用し、施策を展開する予算措置を相当の比重で講じています。

芸術や文化は、今日の都市政策でも重視されています。大量生産・大量消費型ではなく、人間が生活する創造性に満ちたサステナブル(持続可能)な都市が求められているのです。(佐々木)



14:00~16:00

現代アートと法律

講師:作田知樹(Arts and Law ファウンダー)

会場:佐賀大学本庄キャンパス 芸術地域デザイン学部1号館 A101講義室

出席者数:27名



表現者や文化芸術関係者からの無料相談を受け法律的なアドバイスを行う支援団体「Arts and Law」創設者の一人、作田氏によるレクチャー。導入は、器物損壊から価値ある資産へと建物所有者の法的態度が一変するバンクシー、そして中国でのニセ草間彌生+村上隆展。つづいてデュシャン、ウォーホル、赤瀬川原平、森村泰昌など、オリジナリティ神話やアウラ神話の解体をめぐる表現が複製技術によって補強される構図、すなわち著作権(copyright=複製権)の拡大がオリジナリティ神話を延命させるという皮肉な相互依存関係が指摘された。後半では米国フェアユース規定や英国フェアディーリング規定など海外の制度紹介に続き、国内の表現の自由と規制をめぐる事例として岡本光博、高嶺格、鷹野隆大、Port B、リミニ・プロトコル等の事例が示され、芸術家ならではのしなやかな対処のほか、個々の現場にて粘り強く議論を深め相互理解を促すことの重要性が説かれた。(花田)





数多くの教育普及事業を行っている横浜美術館主任エディケーターの端山聡子氏のレクチャー。

横浜美術館では、造形プログラムと鑑賞プログラムを組み合わせた、特色ある教育普及を展開している。実例として「中高生プログラム」や「若者支援プログラム」が紹介された。対象年代の近い受講生からは、今後、自らが教育する側(アートを伝達する側)になった時の参考になったという声が多く出ていた。

プログラムを立ち上げるには「意義や目的」をはじめに位置づけるが、活動中にも常にそこに立ち返り、プログラムの進行が適切であるかを検討することが重要である、と解説。プロジェクトに関わるスタッフがその意義・目的・方法・成果を語れるかということも、成功に導くための非常に重要な要素だと指摘された。また、実施中と終了後の参加者のコメントや行動が成果であり、言葉にしない表情を読み取る努力も必要であること、それらを感じとって次につなげ、さらなる循環を繰り返す中に成功していく道筋があることが説明された。

ひととアートのつながりを教育的視点から解説しながら、プロジェクトを成功に導くコツが分かりやすく説明され、最終講座にふさわしい内容となった。(小坂)



受講生の構成

年代	
10代	16名
20代	6名
30代	7名
40代	11名
50代	8名
60代	2名
70代	1名
計	51名

職業	
会社員	8名
自営業	7名
公務員	4名
パート	3名
公益財団	2名
高校生	2名
グラフィックデザイナー	1名
教員	1名
無職	1名
大学生	18名
その他	4名

受講生の声

6/30 講座
アンケート
より

自分が思っているよりもアートプロジェクトを実行するというのは根気が必要だと思った。企画はするだけでなく、終わった後のことも考えるというのが印象的だった。

自分が佐賀の良さを伝えるために行動しようと考えて、具体的に考え始めて、行き詰っていたところで森先生のお話を聞いて、どのように進めていくべきかを考えることが出来ました。とても勉強になりました。

7/28 講座
アンケート
より

誰のもののアートなのかということをきちんと考えないと悪い方向に動く可能性があることを初めて知りました。アートの定義や他のものとのつながりのラインはあやふやな分、アートには良い意味でも悪い意味でも大きな力があると思いました。

今思えば自分の身の回りで起こっていた地域のアートの活性化はすべてアートを道具に近い使い方をしていたような気がした。

9/1 講座
アンケート
より

アートフェスにおいて、身の部分ばかりに目がいていたが、その背景にある哲学や文化、風土にも着目しようと思いました。

時間をかければいいというわけではないですが、構成をねって、その地域に根ざしたものを多くの人で作っていくということは、長い時間がかかると感じました。変化にオープンでポジティブであることが大切なのはわかるけど、日本ではその意識が低いかなあと感じます。

9/15 講座
アンケート
より

ただイベントを起こすだけでなくその後や、そのイベントの先を見越した動きがこれからの文化芸術を発展させていくうえで必要であるという事を学べた。自分の地域文化に誇りを持つことは大切だという事が再確認させられたし、やはりちゃんと知ることが大切だと感じた。

地域の文化に誇りを持つという言葉が素敵だなと思った。誇りを持つためにも知ることが大切なんだと再確認させられた。

10/27 講座
アンケート
より

今まで何気なく見ていた画集やアーカイブも、その複製技術によってオリジナリティが担保されている矛盾が新鮮でとても面白かった。また、自治体職員として、現代の社会に疑問を訴えかけるような先進的な作品を、今日の講座のような理由で展示できない、という結果には終わらせたくないと感じた。

いっけんするとそれほど関わりがないかのようにも見える、アートと法律ですが、とても深く関わっており、アートにたずさわる身として、もっと法や社会について学びたいと思いました。

12/8 講座
アンケート
より

アウトリーチ事業は、ただ手を動かす、鑑賞するで終わらないために、きちんと実施条件や資源を基に意義や目的を考える必要があると再認識しました。また、アンケートは、「意見や感想を得られた」と企画側が一方的に満足しがちなので、その感想・意見に至るまでのプロセスをしっかりと観察することは本当に大切だと思いました。

時に偶然に任せてやってみて、結果を振り返り次につなげることが大事だと思いました。

全体
アンケート
より

2年続けて受講して少しずつ自分の中で形となった部分があります。ありがとうございました。

アートプロジェクトを様々な視点から学ぶことができ、毎回とても面白かったです。後は実際に佐賀に落とし込んでどう考えていくか、悩みながら受講させていただきました。

芸術で地域を拓く／芸術を地域に開く

小坂智子



SMAARTでは、昨年に続き、アートマネジメントセミナーを開催した。地域において芸術・文化に携わり、地域の文化振興を担うことのできる人材を養成することが、その目的となっている。

日本において、芸術のマネジメント人材の養成が求められ、本格的に大学等において教育が始まったのは1990年代の初めである。バブル期に各地に建てられた音楽や文化ホールの運営に関わる人材が必要とされたこと、博物館・美術館の領域においても、経営、マネジメントの視点の必要性が問われだした時代であった。

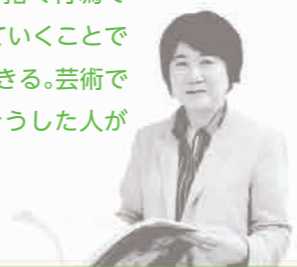
当時は、専門家としてのアートマネジャー、アートアドミニストレーター養成が求められていたように思う。その育成は、大学の学部レベルから、大学院に発展し、ビジネススクールのケースメソッドを導入したカリキュラムの実施などへと発展していった。

それらの動きと併行して、日本では現在使われているような意味でのアートプロジェクトという言葉が使われるようになったように思う。アーティスト主導であれ、キュレーターの企画であれ、既存の施設では実施できないことを、美術館やギャラリーを抜け出して、人々に提示する動きは各地でひろがる。

次第に、施設を運営し、展覧会やイベントをオーガナイズする専門職としてのアートマネジャーから、地域における文化活動にゆるやかに参画したり、アーティストをサポートしたりという役割をになう人材が求められてきた。創造する行為から、それを受け止める人までのあいだを、様々な段階や濃淡の中でかかわろうとする人たちが求められ、登場している。そうした地域の中で、芸術に関わろうとしている人々の背中をもう一度押して、道筋をつけていくこともまた、アートマネジメントの教育といえるのではないだろうか。

佐賀大学芸術地域デザイン学部は、芸術を通して地域創生に貢献する人材の育成をその目的とし、「芸術で地域を拓き、芸術で世界を拓く」という言葉を掲げている。芸術で地域を拓くとは、単に、芸術を地域創生の手段として用いるということではない。アートプロジェクトの隆盛の中で、アートをまちづくりの手段にするなどということは、しばしば耳にする。

芸術を創造し発表していくことそのものが地域を、世界を拓く行為である。ひとびとと芸術をつなげていくこともまた、地域を拓いていくことである。後者は、芸術を社会に「開く」行為といい変えることもできる。芸術で地域を拓き、芸術を地域に開く。SMAARTのセミナーから、そうした人が生まれてほしい。



SMAART

アートスペース見学



2018

7/14 [Sat]

GALLERY SOAP
福岡・小倉

8/11 [Sat]

サナトリウム
福岡・天神

9/29 [Sat]

art space tetra
福岡・博多

10/13 [Sat]

HAMASHUKU KURABITO
佐賀・鹿島

11/10 [Sat]

アートスペース獺
福岡・天神

2018

7 [Sat] 28

14:00~16:00

GALLERY SOAP

講師:宮川敬一(GALLERY SOAP 代表)
参加者:5名



カフェバー等を備え芸術関係者によって運営されているアートスペースを見学するプログラムの初日は小倉のGALLERY SOAP(以下SOAP)。ここでは美術家、音楽家、建築家、研究者などが出入りしては夜な夜な芸術談議に花を咲かせており、その磁場に吸い寄せられて国内外の美術関係者によるリサーチも多く来る。オーナーの宮川敬一氏は1990年代から活動しているアーティストであり、「パラサイト・プロジェクト」(1996-97)、「北九州国際ビエンナーレ」(2007-)をはじめとする種々の意欲的なアートプロジェクトの仕掛け人でもある。トークでは1997年の開設から現在に至るまでの展覧会やSOAPを拠点に展開されたアートプロジェクト等が概観された。(花田)



アンケートより

20年にわたる活動はとても興味深い。海外へ出てゆく発想はおもしろいです。いろんな方との企画はとても大きな財産ですね。



約20年続けられている活動を聞いてとても勉強になりました。20年間で大変だったことは?の質問にお金以外大変だったことはない、とおっしゃっていたのが印象的でした。



〈会場案内〉

1997年5月に北九州市小倉北区に設立されたアーティストスペース。設立以来、展覧会、音楽イベント、上映会、トークショー、演劇などを開催。また、RE/MAPプロジェクト、北九州ビエンナーレ、ホテルアジアプロジェクトなど国際的なプログラムも企画しています。2018年はホテルアジアプロジェクトとして、ジョグジャカルタ、重慶、台北、ウィーン、北九州、沖縄をツアーするプロジェクトを展開中。

福岡県北九州市小倉北区鍛冶町1-8-23 2F

2018

8 [Sat] 11

18:30~20:00

サナトリウム

講師:角孝政(サナトリウム 代表)
参加者:8名



「サナトリウム」は美術家の角孝政氏が2015年、福岡市天神に開設したアートスペース。療養所を意味する店名の通り、内装・展示物・販売物・飲食メニュー・スタッフの所作など、「病院」に関連する世界観で店内が統一されており、いったんその怪しげな空気に身を浸すとホスピタル・シンドロームに罹ってしまう。同じく角氏が2008年に開設した「不思議博物館」と同様、コスプレやロリコンをはじめとするマニアックな文化やオタク文化など、アンダーグラウンドなテイスト全開の角ワールドにアディクトされた人たちがうっかり通院してきては更にビョーキをこじらせている。

スペース見学には佐賀大学生が多く参加。角氏も佐賀大学OBとして、表現で身を立てることやスペースを構え維持していくことをめぐり、悲喜こもごもの苦労話を交えつつ熱く語ってくれた。(花田)



アンケートより

館長さんがとてもよかったです!!お話を聞いていて、なぜかワクワクしました。また個人的にこの場所を訪れたいです。現地に赴いて聞くトークは、学内での講義の100000倍楽しかったです。



あまり、ホームページ等で店内の様子は調べずに、周りの人から聞いたイメージだけを持ってサナトリウムにきました。世界観がとても好きです。ねこちるもすごく気になったので、今度調べてみようと思います。



〈会場案内〉

結核の療養所サナトリウムをイメージしたコンセプトカフェで、不思議博物館館長・角孝政の作品群の一環として2015年に天神の繁華街の裏手に作られました。ギャラリースペースでは、ほぼ月替わりで作家の作品を展示しており、主にサブカルチャーに関する作品を扱っています。

福岡でサブカルチャーを専門に扱っている画廊は2018年現在他に無く、唯一の施設と言えます。

福岡県福岡市中央区天神3-3-23 佐伯ビル3階



2018

9 [Sat] 29

14:00~16:00

art space tetra

講師:古賀義浩 (art space tetra 運営メンバー)
参加者:5名



2004年にアーティスト、デザイナー、キュレーター等が集まって家賃・光熱費を出し合ってオープンした art space tetra(福岡市博多区)。まずは1Fのギャラリースペース、2Fの居間のようなまり場、3Fの屋根裏部屋を見学。続いて現在の運営メンバーの一人、古賀義浩氏(美術家)から同スペース開設の経緯、運営方法、展覧会・イベント事例などが話された。基本的に運営メンバーが各自やりたい企画を自主的に実施する方式。メンバーは新旧入れ替わりながら続いているが、ユニークなのはリーダー的存在を置かず、運営理念や企画方針といったポリシーもあえて定めないことで、フラットでニュートラルな組織の状態を保っていること。結果、メンバーそれぞれの価値観や主体性が運営にダイレクトに反映されている。(花田)



アンケートより

長く続いているのは何故かというのが知りたかったのですが、何回も分裂を繰り返したりという事もなく、10年以上続けられている事、場所へのアクセスもやはり重要と思いました。ありがとうございました。



リアルな状況をここまで教えてくれるんだ...と思いました。運営側のいろんな事が知り得たことに感謝します。

〈会場案内〉.....

美術家、音楽家、思想家、様々な分野の表現者・実践者たちが集まって自主的に運営されているアート・スペース。

ハードコアな企画あり、フレンドリーな企画あり、野心的・刺激的なメンバーによって生み出される特殊な磁場は国内外からの注目を集めています。

福岡県福岡市博多区須崎町 2-15

2018

10 [Sat] 13

14:00~16:00

HAMASHUKU KURABITO

講師:川崎泰史 (HAMASHUKU KURABITO 代表)
参加者:8名



2016年、佐賀の銘酒『鍋島』で知られる富久千代酒造の出資のもと酒蔵が改装され、佐賀県鹿島市浜町にオープン。美術家の川崎泰史氏によって運営されており、氏は午前中酒蔵の蔵人として働き、午後から美術家として制作にあたっている。スペース内には制作スタジオ、展示スペース、カフェがあるが、客のニーズに応えようとするあまり展示やカフェ営業をがんばりすぎて制作のエネルギーが削がれるのは美術家として本末転倒とのポリシーから、運営の中心は制作スタジオに置き、展示やカフェ営業はその妨げにならない範囲にとどめている。支援者や客との一定の距離感を保つ、美術家らしいバランス感覚による運営スタイル。(花田)



アンケートより

街とワークのつながり方を考慮しつつ、自分のカラーを映し出すことの信念を感じました。アートへのかかわり方を再度見つめなおし、地域に根づく街づくりを私も出来たらいいなと思いました。



オーナーが芸術をビジネスと捉えていらっしゃることに大変興味を持ちました。

〈会場案内〉.....

佐賀の銘酒『鍋島』で知られる富久千代酒造のオーナーが開設したアートスペース。

改装された酒蔵の趣ある空間に、作る場所、見せる場所、語る場所が自然に共存しています。

佐賀県鹿島市浜町八宿乙2688



2018

11

[Sat]

10

14:00~16:00

アートスペース貌

講師:小田律子(アートスペース貌 オーナー)

参加者:7名



福岡市の親不孝通りに面するギャラリーで福岡では老舗中の老舗。オーナーの小田夫妻が九州産業大学の隣に開業した「喫茶店貌」(1972~2008年)に続いて、1976年に同ギャラリーを開設。当時は喫茶店の店内に作品を飾る画廊喫茶が主流であったなか、作品をしっかりと見せるべく、展示スペース「アートスペース貌」と飲食スペース「屋根裏貌」とに分け隣接させる形でオープン。写真家の野村佐紀子や絵本作家のよしながこうたく等が巣立ったこの場での展示を希望する作家も多いが、誰もが借りられるわけではなく自然とオーナーの目に適うものに絞られる。見学当日は元村正信展が開催されており、貌の初期から歩みをともしてきた美術家として元村氏にもトークに参加いただいた。(花田)

アンケートより

貌と元村さんをはじめアーティストの方々、喫茶に来られる方々の深い交流が、あめ色の店内にしみこんでいるのだとしみじみ感じました。芸術とアートについて考えていきたいです。また来たいと思います。ありがとうございました。



オーナー(マスター)の人物と人間力がとても素晴らしいのでしょう。こんなに長く経営を続けて来られて、アーティストとの交流もとても貴重な財産ですね。

〈会場案内〉

昭和期に数多く存在したいわゆる画廊喫茶の一つで、福岡の中でも老舗中の老舗。「アートスペース貌」は展示スペースと喫茶スペースがそれぞれ独立していることから、しっかりと作品鑑賞でき、しっかりと余韻に浸ることができます。

オーナー夫妻のお人柄を慕い、この場で夢を育んだ表現者たちは数知れず。

福岡県福岡市中央区天神3-4-14



PROJECT MEMBER'S

Essay

アートスペースとアートカフェ

西島博樹



2018年度のSMAARTではアートスペース見学が企画された。私は、佐賀県鹿島市と福岡市天神の2か所を訪問したが、両方ともにカフェが併設されていた。専門家の花田氏(佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授、SMAART運営主担当)によれば、アートスペースは、文字通り、芸術作品(アート)を展示する空間(スペース)であり、飲食施設(カフェ)を必須とするものではない。では何故、アートスペースで飲食を提供しているのか。いうまでもなくその理由は「アートだけでは飯が食っていけない」からである。しかし、そのカフェには、経営学やマーケティングの授業で教えているものとは全く異なる独自の経営哲学が存在していて、とても興味深かった。

鹿島市のアートスペースは、作品の制作拠点およびその展示場として活用されていた。店主によれば、あくまでも芸術家が本業で、カフェ経営は副業である。したがって、海外で個展を開催する際などには、カフェは長期休業となる。「スペースに来るお客さんの欲求を満たす必要はない。芸術家としての立場(自分のルール)での接客や経営を試みている」という趣旨を述べられていたが、これは顧客満足を最優先するマーケティングの教科書にはけっして書かれていない。もちろんカフェは地域の方々に支持され、パーティやライブイベントなどで大いに賑わっていた。

福岡市のアートスペースは、ご夫婦で経営されているが、自らが芸術家というわけではなく、主として新人作家や無名作家を支援・育成するための展示空間(いわゆる画廊)である。その隣にカフェが併設されている。オーナー夫妻によれば、「画廊とカフェは切り離せない。カフェがあったからこそ、長きにわたって芸術家の支援を続けることができた」。つまり、ここでも芸術が主であり、カフェは従である。夫妻の経営理念には経営学でいう利益優先の思想はカケラもない。私たちが見学した当日も多くの人たちが集ってアート談議で盛り上がっていた。

昨年私はアートカフェについて次のように書いた。「アートカフェは、アートというネタに惹かれて集まってきた人々が、コーヒーを飲みながら、わいわいがやがやと自由気ままに議論を戦わせる場である」。そうであるならば、アートスペースとアートカフェを区分する境界が曖昧になってくる。少なくとも、個人で経営されるアートスペースはアートカフェと同義語になっているのではないか、そのように感じた今回のアートスペース見学であった。



SMAART

フォーラム

「茶・藝・道 — 売茶翁と現代ストリート文化 —」



2018
8/18 [Sat]

第一部 レクチャー

黄檗宗と美術

錦織亮介

美術史における売茶翁の足跡

狩野博幸

禅の教えと茶の哲学

木村勝彦

ストリートの表現者たち

毛利嘉孝

日常にアートを探る

オレクトロニカ

第二部 パネルディスカッション

パネリスト ——— 錦織亮介

狩野博幸

木村勝彦

毛利嘉孝

オレクトロニカ

コーディネーター — 花田伸一

2018年度のはじまり

2017年度のSMAARTプログラムが終了し、ほっとする間もなく2018年度がスタートしました。

今年度の運営は、

一、講座数が多い

一、講座ごとのスケジュールが重なっている

と盛りだくさんです。

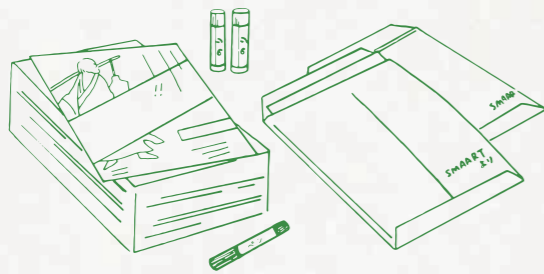
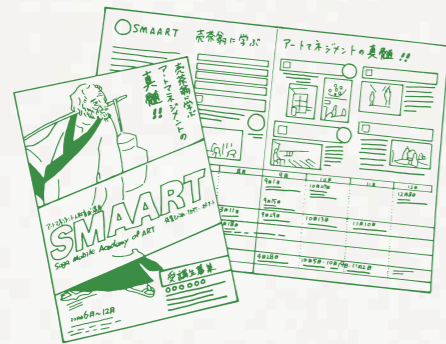
まず、5月の受講生募集に向け、SMAARTの魅力伝えるため、より興味を持ってもらえるため、充実したプログラムを提供できるよう、ミーティングを重ね骨組みを組み立てました。受講生募集チラシの原稿は修正を繰り返し、掲載する写真の選別、読みやすい文字の大きさ、色、フォント……。何度も修正を重ねてしっくり感の出ているところには全文丸暗記に近い状態です。夢には売茶翁がチラシを配って歩く姿まで浮かんでくるのです。

こんな仕事をしているとどこそこの手に取るチラシ一枚の見方が変わってしまいます。

「このデザインはおもしろいなあ〜」

「字が多くて読みにくいなあ〜」(大きなお世話です)

「フォントの使い方がかっこいいなあ〜」



「このアイデアいただき〜」等々。
私はいったい何者になってしまったのか(笑)と。

そんなこんなでスタッフの愛情をたっぷり注がれ誕生したチラシは、2018年5月8日、事務局の元から新たな出会いを求め佐賀近隣各地に巣立っていきましました。どんな人が手に取ってくれるだろう……。楽しみ。

(イラスト:文/事務局)



2018
8
[Sat]
18

13:30~17:00

フォーラム 茶・藝・道 -売茶翁と現代ストリート文化-

「黄檗宗と美術」 錦織亮介(福岡市美術館館長)
 「美術史における売茶翁の足跡」 狩野博幸(美術史家)
 「禅の教えと茶の哲学」 木村勝彦(長崎国際大学副学長 人間社会学部教授)
 「ストリートの表現者たち」 毛利嘉孝(東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授)
 「日常にアートを探る」 オレクトロニカ(美術ユニット/加藤亮+児玉順平)
 会場:佐賀大学本庄キャンパス 理工学部6号館1F 大講義室
 参加者数:72名



錦織亮介氏



狩野博幸氏



木村勝彦氏



毛利嘉孝氏



オレクトロニカ(左から児玉順平氏、加藤亮氏)



2018年末および2019年度に取り組むアーティスト・イン・レジデンス事業に向けてのキックオフとしてフォーラムを開催。

SMAARTでは地域の歴史文化をふまえながらアートプロジェクトを企画運営できる人材育成を謳っており、佐賀での地域資源を活用したプロジェクトの一例として、有田や唐津のやきもの文化、嬉野の茶文化、小城などの和菓子文化に着目し、県内でアートカフェを展開する企画を進めている。

そのアートカフェ企画の思想的な拠り所の一つとして、江戸期に京都鴨川ほとりで道行く人々に煎茶を振舞い、当時の文化人に多大な影響を与えた佐賀ゆかりの禅僧、売茶翁(1675-1763)に着目している。本フォーラムは各専門家による個別レクチャーと全体ディスカッションの二部構成とし、美術家、美術史家、歴史家、社会学者など、複数の視点から売茶翁の活動を振り返り、現代の

プロジェクトにどう活用できるのかについて話し合った。

錦織氏「黄檗宗と美術」では隠元隆琦禅師が日本にもたらした黄檗文化の歴史や、建築・仏像・肖像画など黄檗美術の特徴が説明された。

狩野氏「美術史における売茶翁の足跡」では伊藤若冲がいかに売茶翁を尊敬していたか、また商人の地位が低い社会状況にあって「売」茶翁を名乗ることの意義などが語られた。

木村氏「禅の教えと茶の哲学」では松浦鎮信の鎮信流茶道を紹介。町人ではなく武家において茶道は礼儀であり商売とは対極にあるとの構えで売茶翁と好対照をなした。

つづいて話題は現代へ。毛利氏「ストリートの表現者たち」では自身が携わる路上演劇「水族館劇場」などを紹介しつつ、思想的なストリート活動の特徴として、移動しながら点と点を結ぶ、実践的、複層的、非言語的表現などのキーワードが挙げられた。

オレクトロニカ「日常にアートを探る」では自身の初期の路上での活動から現在の多岐な活動に至るまでの道程を紹介し、SMAARTで取り組むプロジェクト《side by side》について発表した。(花田)





前半の個別レクチャーに続き後半はパネリスト全員によるディスカッション。

狩野氏は江戸期に「自由」の語が既にあり、売茶翁や芭蕉らは既存の権威に縛られない「自由」を体現していたとし、西洋哲学の輸入以前の日本の「自由」について一考の価値ありと示された。

木村氏は本フォーラムのタイトルに含まれる「道」に

関して、売茶翁は「道」の語に示されるような権威を離れて市井に活動したことから、その姿勢を改めて掘り下げる必要性を説かれた。

錦織氏は美術館長の立場から近年、美術館に地域との交流や賑わい作りが求められる傾向が増している傾向を挙げられ、売茶翁プロジェクトをその流れに位置づける。

毛利氏はストリート文化や現代アートに詳しい専門家として売茶翁プロジェクトのコンセプトや問題意識への共感を示し期待を寄せられた。

オレクトロニカ加藤氏は売茶翁が「路上」で活動する点と「売る」点に着目しつつ改めて自身の活動へと重ね合わせ、オレクトロニカ児玉氏はマイナスからプラスへと価値観を転換するアートの力に言及しつつ、佐賀での

プロジェクト実現に向けての意欲を語った。

歴史を振り返り現代の活動へと繋げていくための本フォーラムにおいて、売茶翁プロジェクトは多くの参加者と専門家の立ち会いのもと無事にキックオフを果たせた。(花田)

参加者の構成

年代	
10代	5名
20代	5名
30代	5名
40代	8名
50代	9名
60代	17名
70代	18名
80代	5名
計	72名

職業	
会社員	12名
大学生	7名
公務員	6名
自営業	5名
パート	1名
主婦	1名
学芸員	1名
古美術商	1名
保育士	1名
無職	18名
その他	19名



参加者の声



「売茶翁と現代ストリート文化」というタイトルから全くアンマッチと思っていたが、アートとかストリートとか固定観念でとらえすぎていたなと反省。「何でもあり」の気持ちでカベを突き破っていきましょう。今日のセミナーは予想以上におもしろかった。(80代男性)



売茶翁について個人的に勉強してみようと思います。佐賀の地味さを生かしたプロジェクトを考えていきたいです。(20代以下女性)



テーマが大きく結論がすぐに出るような内容ではないと思いましたが、歴史を検証し作り上げていくことは非常に有意義な取り組みだと感じました。佐賀市民ですが、今後関わっていければと思います。(40代男性)



各自の講師の話をもっと聞きたいと思った。五組の方々はそれぞれ特徴が異なりとても興味深かった。惜しむべきは持ち時間が短すぎたようで核心の部分の話が十分に聞けなかったように思った。(60代女性)



前段の講話と後段の講話とギャップがありすぎてよくつながりが理解できなかった。もっと時間をかける必要があったのではと思いました。(70代男性)



もう少し一人一人の時間を長くしてほしい。1回に1人の先生のお話にしていただければ内容的にもっと深く掘り下げて話してもらえたかも。あまりにも時間が短かったのでは。(60代女性)



いろんな面から売茶翁についての話が聞けて良かった。以前から気になっている売茶翁について話が聞けて楽しかった。特にオレクトロニカのside by sideは発想が良いな。と思った。人間は同じ「もの」を見ても違っていておもしろいですね。(50代女性)



「アート」という言葉の難しさを感じました。「アート」は自由なものだと思っていたけど、お話の中で「型がある中での自由」ということが言われていて、結局現代アートとは何なのか？ストリート文化とは？とよくわからなくなってしまいました。売茶翁やストリート文化についてもっと知りたくなりました。(20代以下女性)



新旧のアートに関する意見が聞けて面白かった。現代アートにはまだまだ分からないことが多いが、今後チャレンジしようと思います。(50代女性)



意外と若い二人の(オレクトロニカ)の話が気に入りました。お茶の木の屋台は見たい。パネルディスカッションの私は両方(歴史・現代)と理解できます。(50代女性)



新しい形のフォーラム、これからどうなるか楽しみです!! プロジェクト、是非面白いものを作ってください!! 私も煎茶を外でふるまおうと思っています!! (40代女性)



「道を説く」と人は寄ってこない…。確かにそうだとして人は道に迷ってしまうもの。そういう時こそアートの価値の出番か…。売茶翁、初めて知りましたがとても興味深い人ですね。アートとの結び付けでどう展開するか楽しみです。(50代男性)

SMAART

アーティスト・イン・レジデンス SMAART AIR
ウォーム・アップ



2018			
6	[Tue]	[Wed]	リサーチ
7	[Thu]		関係者ミーティング
8	[Fri]		リサーチ
8	[Sun]		サポーター募集・プロジェクト説明会
9	[Thu]		サポーター・ミーティング①
11	[Thu]		サポーター・ミーティング②
12	[Sat]	[Sun]	茶の木屋台プロジェクト 《side by side》実施

雨男Sの役割とは

2018年度初日。トップバッターはポータルサイトの編集部ミーティングでした。開講初日、交通機関も乱れる春の嵐。昨年度、雨男の座にいたのはH先生。しかし、今年度はS先生がその座を引き継いだ様です(スタッフ公認)。雨男Sの威力は「雨が降る」「天気が悪い」などのレベルではありませんでした。開催をも危ぶまれる警報レベルです。「嵐を呼ぶ男! (素敵!!)」

開講初日は朝から関係者で連絡を取り合い、受講生の安全を第一に考えました。幸い、午後には天気も落ち着き無事講座開催へと落ち着いたのです。

その後も雨男Sの威力は衰えを知らませんでした。9月の担当講座は雷雨、11月にもなって台風を呼び、締めくくりにSMAART AIRでは曇り空を登場と共に雨空へと変えたのでした。ただ、どの日も終了間際には天気も落ち着き、プログラムも無事終了。スタッフは天候対策にバタバタしましたが、結果いい経験をさせてもらったのです。これぞ人材育成。雨男Sには、「雨を降らせて地を固める」という役割がちゃんとあったのです。前年度雨男日談。「毎回いい仕事をするな。彼に任せてよかったよ。ほんと……。」

この他にも今年度は天候(特に暑さ!)に悩まされた一年となりました。アートマネジメント・セミナー初日は梅雨空で湿度が高く蒸し暑い日でした。講義室暑い!! クーラー効かない!! 講義室のエアコンは温度下限設定があったようで、

風量設定は「弱」で温度を下げるボタンを何度押ししても表情を変えない(涙)。学生の聴講もあったことから231人収容の講義室は隙間ないほどの超満員でした。受講生は下敷きバタバタ。講師森さんの講義も熱く、「燃えよ! SMAART!!」状態。これに学び講座第2回からはまず下見を兼ねてエアコンのチェック、熱中症対策に「SMAART特製ドリンクコーナー」をオープンするに至りました。

また、今年度目玉のプログラムともいえるフォーラムは8月半ばに開催したことから、参加者の体調に最も気を使った一日となりました。熱中症予防に塩飴、ドリンクコーナーはいつもより充実させ、冷却用の氷はスタッフで手分けして家の冷凍庫から持参しました(牛乳パック氷もあったな)。

受付時間前から学生スタッフは交代で自転車にまたがり、給水用のお茶をかごに入れ、大学の広いキャンパス内、会場までの道のりに力尽きた人はいないか巡回してくれました。まさに若き売茶翁。幸い参加者皆様特に体調を崩されることもなく、何事もなく無事終了です。本当によかった。(イラスト:文/事務局)



招聘アーティスト オレクトロニカ (加藤亮+児玉順平)

大分県竹田市を拠点に活動する美術ユニット。「制作と生活」をモットーに活動を展開。

2018 6/26・27 [Tue] [Wed] 関係者顔合わせ・現地リサーチ

招聘アーティストのオレクトロニカ(加藤亮+児玉順平)が、佐賀へ。

佐賀ゆかりの禅僧「売茶翁」にちなんだアートプロジェクトに取り組むため、佐賀市内のリサーチをおこなった。



売茶翁の
情報発信を行う施設
「肥前通仙亭」



佐賀市の中心に
位置する白山商店街
プロジェクト開催の
候補地としてチェック

2018 7/12 [Thu] 関係者ミーティング

佐賀市でのリサーチをもとに、プロジェクト企画の検討をアーティスト・関係者間でおこない、オレクトロニカは「茶の木をのせた屋台」を提案。《side by side》と名付けられた。



<コンセプト>

今回レジデンスをさせて頂くにあたり、限られた時間と条件の中で自分達なりに最もベストな答えは何かというところをテーマに議論した。その上でやはり、コミュニケーションを生み、これから日常においてのアートがより促進しやすくなるような、種蒔きの意味もある作品が良いのではないかと結論した。路上で茶を売り続け、コミュニケーションを重ねた売茶翁にちなみ、茶にまつわる様々な事柄を体験出来る移動式屋台を制作することにした。その屋台はコミュニケーションを生み、色々な文化活動に連鎖するのではと期待を込めた。(オレクトロニカ 佐賀レジデンス 作品案より)



2018 8/17 [Fri] プロジェクトのためのリサーチ

8月からは企画案をもとに具体的な動きへ。

茶の木屋台を実現させるため関係各所への相談などをおこなった。



佐賀県茶業試験場へお茶に関する相談

2018 8/19 [Sun] サポーター募集・プロジェクト説明会

(佐賀大学まちづくりサテライト ゆっつら〜と館)

共にプロジェクトを動かしていく地域サポーターの募集、アートプロジェクト《side by side》について説明会をおこなった。



2018 8/20~23 [Mon] [Thu] サポーター募集・決定

サポーターは社会人、学生あわせて12名が集まった。

2018 9/6 [Thu] サポーター・ミーティング①

2018 11/15 [Thu] サポーター・ミーティング②

9/6(木)、11/15(木)にサポーター・ミーティングをおこない、茶の木屋台は2台制作し、1台はオレクトロニカが、もう1台はサポーターのアイデアによるオリジナル屋台を展開することに。サポーターの得意分野などをベースに様々な企画が提案された。

そして、特製ブレンドティーのふるまい、イラストやテキストを用いた当日配布のパンフレットの作成、場の演出として楽器の即興演奏、プロジェクトに関連した展示をおこなうことを決定。

役割分担をおこない、それぞれのアイデアに向けて12月には自主的に準備を進めた。



ミーティング風景

2018 12/5・6・9・14 [Wed] [Thu] [Sun] [Fri] サポーター・オフミーティング



お茶のふるまいをおこなう(カフェチーム)は、ほうじ茶ベースの特製ブレンドティーを考案。

お茶を通じて会話が生まれるよう、ブレンドするのは、オーソドックスなレモンガラスから、佐賀の特産品ムツゴロウやワラスポのお茶まで様々なものを用意。

当日配布のパンフレットを作成する(ドキュメントチーム)では、パンフレットに掲載するイラストやテキストまた、パンフレットの構成などすべてをサポーターでおこなった。パンフレットを見ることでより茶の木屋台を楽しめるように作成。



音楽担当は大人から子供まで楽しめるよう、いろんな種類の楽器を準備。



広報ではプロジェクトのチラシをもとに、中国語の文章を作成しFacebookに掲載。



記録写真としてデジタルカメラだけでなく、フィルムカメラでの撮影もおこなった。



今回のプロジェクトとの特別コラボとして「ハコウマキッチン」プロデュースによる、チュロスとお茶をミックスした「チャロス」を開発。



©長野聡史

茶の木屋台制作

茶の木屋台はオレクトロニカが制作。



屋台に使用する茶の木は人力で掘りおこした。
(佐賀県茶業試験場)



2018 12/7~23 [Fri] [Sun] 関連展示「ドキュメント展」

※グループ展「発生の場 / Ignition Field」内での展示(本庄ビル・佐賀市)

プロジェクト実施日の前後にまたがって、サポーターとの準備の様子や実際に使用する茶の木屋台の展示をおこなう関連展示も開催。



テレビ取材

事前準備～本番までをNHK佐賀放送局が追っかけ取材。約10分間の特集が生まれ、12/21(金)に佐賀で放映。



©長野聡史

36-38ページのクレジットの記載がない写真はオレクトロニカ、サポーター、事務局が撮影。

サポーターの構成

年代	
10代	1名
20代	6名
30代	2名
40代	2名
50代	1名
計	12名

職業	
大学生	7名
会社員	2名
アルバイト	1名
その他	2名

サポーターの声

サポーター同士の意見交換、共有が時間が無くうまく取れずどのくらいの人数で、どのくらいの気持ちで関われる時間があるのかわかりづらく組み立てが難しかった。

初めての経験でサポーターとしての関わり方が良く分からなかった。

コミュニケーションも一つのアートの手法手段になり得る事。日常、どこにいても暮らしを豊かにできる空間、人との関係づくりがアート感覚を+αすればちょっとさらに素敵な時間が生み出せる。今後の暮らし仕事に取り入れて行きたい感覚を学ばせていただきました。

大学で美術史専攻だった私に用意くださった役割が、苦しい文章の執筆だったため、初めは(実は直前まで)本当に逃げ出したい気持ちでいっぱいでした。しかし、オレクさんや花田先生のお話を聞き、売茶翁やお茶について調べ、まとめる作業をしていく中で、徐々に面白くなってきました。初めて見た(知った)人に、わかりやすい言葉で、なぜ、どんなことをめざすのか、伝わるよう工夫をしました。文章自体は現在も修正したい箇所があるのですが、結果的にとても良い役割をいただけたと思っています。大きさですが、長年、文章への苦手意識は私自身の課題だったため、SMAARTのおかげで少し克服できた気がします。

「絵」の役割は、「そのものの魅力を引き出すこと」なのだ改めて気づかされました。もっとふさわしく対象の魅力を、わかりやすく人に伝えることができるように、視点と技術を養っていこうと思います。

これから、どうなるのか、楽しみです。それが、使命感でなく、「こんなこと面白そうだから、やってみよう。どうしようか？」って小さなおもいつきを、広げていけたら、「アートだ！」って叫ばなくても、その感覚が、生活に根付いていくと思います。

それぞれが主体となって、能動的に関われているように感じた。集団の中での役割が明確にあてられていることが大事。ロールを振る人が必要なんだなあと。

2018

12 [Sat] 15

side by side
1日目

13:00~17:00

オレクトロニカ茶の木屋台プロジェクト 《side by side》実施

会場: 白山商店街・656広場(佐賀市)



大分県竹田市を拠点に活動する美術ユニット・オレクトロニカが佐賀の地域サポーターとともに取り組むアートプロジェクト《side by side》。江戸期の佐賀ゆかりの禅僧、売茶翁が京都鴨川ほとりで道行く人々に煎茶をふるまいながら禅を説いたことをヒントに、《side by side》では嬉野の茶樹を屋台に積み、町なかで煎茶をふるまうもの。

初日は初めての実践ということでスタッフ一同、気持ちも高まった状態でスタート。サポーター提供の楽器を

手にした子どもたち奏でる即興ファンファーレを皮切りに656広場(佐賀市呉服元町)から白山商店街(佐賀市白山)へと繰り出す。道すがら積極的に声をかけつつ、陽気な雰囲気のもと道行く人々に煎茶をふるまった。チュロスに茶を練りこんだ「チャロス」も好評。NHK佐賀局の密着取材もあり、全体として賑やかな祝祭性が醸し出された。

夕刻656広場に戻った後は落ち着いた空気の中初日は終了。(花田)



地域の人の声



お茶の木をのせての発案はおもしろいと思います(60代女性)



関連する体験がもっと増えると良いと思います(20代女性)

普段触れることのない企画に参加でき、これからも佐賀でたくさんのイベントが増えていって人達の交流の場になると良いと感じました。(30代女性)



2018

12 [Sun] 16

side by side
2日目

13:00~17:00

オレクトロニカ茶の木屋台プロジェクト 《side by side》実施

会場：656広場(佐賀市)



初日がテンション高く祝祭性に満ちた雰囲気だったので、2日目は対照的に落ち着いた雰囲気で行こうと朝のミーティングにて確認しスタート。初日は晴天に恵まれたが2日目は小雨だったこともあり、終日656広場に腰を落ち着け、じっくり取り組むことに。

オレクトロニカの屋台では炒った嬉野茶葉を湯呑に1枚入れ湯を注ぐだけのシンプルなほうじ茶。地域サポーターの屋台では佐賀の食材も活かしつつ工夫を凝らしたサポーター考案オリジナルブレンド茶をふるまった。それぞれ客の滞留時間も長く、地域サポーターがイラストとテキストを手がけた解説パンフも会話を後押しし、



茶の話、売茶翁の話、芸術の話、商店街の話、オランダの話、戦時中の話、等々、静かにゆっくりと話ができた。

今回1日目と2日目で同じ活動を異なる演出で取り組めたことは大きな収穫であった。静と動、陰と陽、明と暗、今回の場合は日常と非日常のブレンド比率を変えての演出であったが、それぞれに意義深く示唆に富む機会となった。売茶翁は華やかな黄檗の世界から枯淡な煎茶の世界へ、仏法に仕える身から商いの身へ、つまり聖から俗へと身をやつした。我々がそこに見習うべきは、いずれか一方の思想の是非よりも、その振り幅にこそあるのでは無かろうか。(花田)



地域の人の声



ユニークな屋台で変わったお茶をおいしくいただきました。いろんな可能性がありそうですね。(50代男性)



佐賀も頑張っているなあと思っています。これからも楽しいイベントで佐賀をアピールして下さいね。(60代女性)

いろんな楽器があっぴゅりした(9才女児)



アートプロジェクトの余白と 芸術体験の時差

花田伸一



作品「side by side」について

佐賀に来て何ができるかを考えた時

煎茶の祖と言われる売茶翁に因んだアートプロジェクトの一環ということと、
嬉野という茶の産地があるということ

是非ともお茶にまつわるプロジェクトを行いたいと思いました。

売茶翁は京の路上で煎茶を売りながら、禅の教えを説いていたといひます。

路上で作品を売ることから始まったオレクトロニカの活動と重ね合わせつつ、

アートやお茶の持つ非常に広い拡張性を活かし、

コミュニケーションを生む作品を作りたいと考えました。

この茶の木を載せた屋台は路上をめぐり、

茶の木の鑑賞、その葉を摘んでの製茶、そして茶を振る舞うという、

一連の活動を行うことができます。

お茶にまつわる様々な機能を拡張しながら、

予測を超えた出来事に遭遇することを期待しつつ、

佐賀で茶の木屋台を引っ張ります。

オレクトロニカ (加藤亮+児玉順平)



2018年度のSMAARTでは受講生の実践の場の一つとして、美術ユニットのオレクトロニカによるアートプロジェクト《side by side》に地域サポーターとともに取り組んだ。このプロジェクトでは最初に綿密な計画を立てるのではなく、むしろ余白をたっぷり残しながら進められた。準備期間から本番中まで断続的にアレンジが重ねられ、形を変えていきながら終了を迎えた。良く言えば柔軟で臨機応変な進め方、悪く言えば無計画で他力本願な進め方。

アートマネジメント人材育成プログラムにおいて、こんなに余白だらけの進め方で良いのだろうか。無論、良い。むしろそうでなくてはならない。その余白こそが人々の創造性を引き出すのだから。

「何をどう手伝えれば良いのか分からない」「何がどう着地するのか分からない」「当日どうなるのか不安だ」「そもそも趣旨や意味がよく分からない」等々、余白だらけの進行に地域サポーターも不安、心配、苛立ちを少なからず感じたかもしれない。これらは通常の市場経済におけるビジネスでは極力取り除かれるべきマイナス要因だ。

それは主催する側のマネジメントにおいても同様だ。不安材料はなるべく減らしておきたい。事前に細部まで計画しておいて、その計画通りに粛々と物事を進める方が楽だ。アートプロジェクトに関わるメンバー全員が企画意図を良く理解し、意欲的に取り組み、計画に沿ってトラブルなく順調に物事が進んでいく。こんなに楽なことはない。

しかしそれで果たして「創造的」と言えるだろうか。

芸術が深く「人間性」を扱うものである限り、芸術体験には悩み、不安、疑問はつきものだろうし、それらを取り除くことが芸術作品の質を上げることに繋がるとはどうしても思えない。「人間性」の根幹に触れるような優れた芸術作品が、喜び、賑わい、連帯感といった要素だけで成立するとは思えない。

芸術体験はいつも遅れてやってくる。作品を目の前にして感じた言葉にならない何かをそれぞれが自らの言葉で紐解いていく、そのとき初めてその人にとっての芸術体験が訪れる。それは作品を見た瞬間に啓示のように体験されるかもしれないが、多くの場合は時間差を伴って訪れるものであり、むしろ福音は遅れてやってくるほどに深い至福がもたらされる。

予期せぬ他者との邂逅の回路を断たないためにも、遅れてやってくるであろう至福を醸成するためにも、やはり余白は欠かせない。



SMAART

ポータルサイト編集部ミーティング



- 2018
- 6/29 [Fri] アート情報サイトの編集
講師: 笠井優
 - 7/20 [Fri] 地域における情報発信
講師: 牛島清豪
 - 9/28 [Fri] ポータルサイトの仕組み
講師: 杉本達應
 - 10/5 [Fri] 記事執筆実践トレーニング
講師: 高橋聡太
 - 10/19 [Fri] 記事執筆実践トレーニング
講師: 高橋聡太
 - 11/2 [Fri] 記事執筆実践トレーニング
講師: 高橋聡太

マネジメントとは ～事務局の思い～

今年度はプログラムに、招聘アーティスト(オレクトロニカ)と共に行うアートプロジェクトと、芸術文化情報発信サイト「ほたり」を開設する二つの実践の場を用意しました。

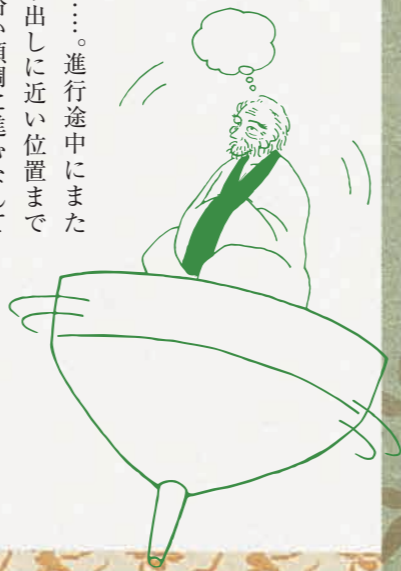
事務局スタッフのみで事前に計画を立て準備を行い、場を提供する流れの他の講座とは異なり、この二つの講座には(当然ながら)作り上げていく過程で受講生の声が反映されなければなりません。受講生の立場や思いは様々です。受け身の体制もあれば自発的に何かを発信したい人、同じ分野での経験を積んでいる人もいれば初めて足を踏み入れた人、社会人に学生、主婦……。アーティストの作品作りに関わりたい、サイト作りに関わりたい、という共通の目的はもちろんあったとしても、それに対するの入口は様々です。

運営側としては様々な意見をくみ取りながらも、ある程度決まった規則と時間軸の中で「前へ進む」ことが課題となっていくと思います。初めに提案する理想的なスケジュールはあつてないようなものですが(笑)、時には厳しくスケジュール管理しながらも、何度も組み立てなおし、反映させるべき声を取り込んでいく作業が続きます。いつ、どこで誰を対象にした企画を実施するのか、準備にかけられる費用は、時間はどのくらいあるのか、

広報活動に関係各所との調整……。進行途中にまた違った意見が反映されれば振り出しに近い位置まで戻ること多々あります。計画に沿い順調に進むなんてことはないと覚悟はしていますが、それでも振幅や余白を持たせすぎても土台が崩れてしまうと思うのです。運営側はある程度の余白は持ちつつ、匙加減を判断しながらゴールまで伴走しようと思っています。ただ、このことは相互に信頼関係があつてこそ成り立つものだと思います(そうでないとただの意地悪にみえてしまいます……)、その関係を築くこともマネジメント能力の試される場所だろうと思います。

「関わっている人が皆共通言語を持ち、プロジェクトの中身を正確に伝えられるかが成功への重要なカギとなるのです」というアートマネジメント・セミナーでの講師の一言。この二つのプログラムを通して、真ん中に一本芯が通った活動を目指し、支えていきたいと改めて思いました。そうして、やはり目指すべきところは運営側であつても受講生と同じでありたいとも思うのです。

(イラスト文/事務局)



2018
6 [Fri]
29

19:00~20:30

アート情報サイトの編集

講師: 笠井優
(西日本新聞社企画事業室事業部/
西日本新聞イベントサービス)
会場: オランダハウス(佐賀市呉服元町)
出席者数: 14名

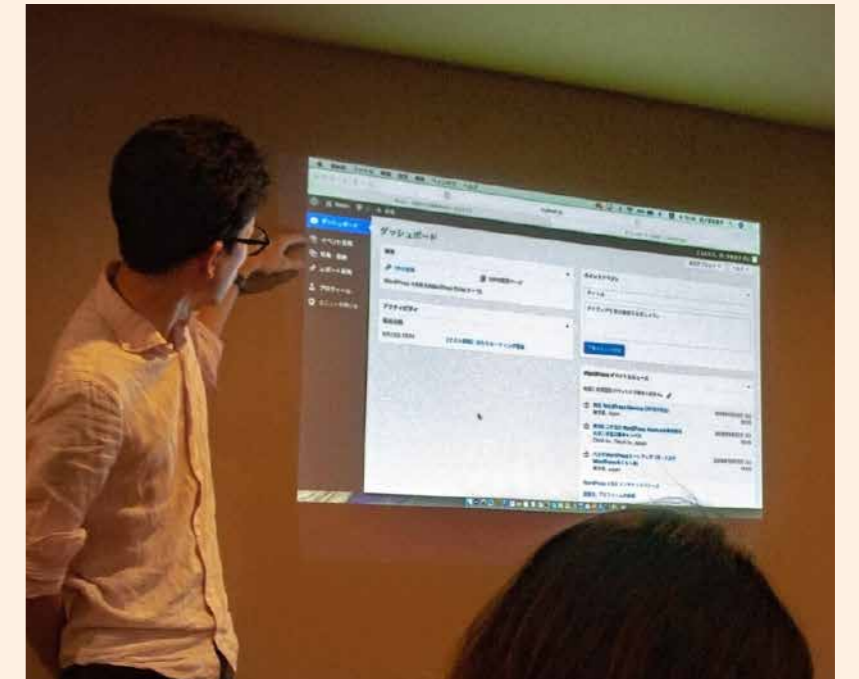


2018
9 [Fri]
28

19:00~20:30

ポータルサイトの仕組み

講師: 杉本達應
(佐賀大学芸術地域デザイン学部
准教授)
会場: 佐賀市内
出席者数: 7名



2018
7 [Fri]
20

19:00~20:30

地域における情報発信

講師: 牛島清豪
(株式会社ローカルメディアラボ
代表取締役)
会場: オランダハウス(佐賀市呉服元町)
出席者数: 9名



牛島さんおすすめの一冊
ジェームス・W.ヤング・竹内均・今井茂雄、1988、
『アイデアのつくり方』CCCメディアハウス

2018年度のポータルサイト編集部ミーティングは、前年度の活動を引き継いでいる。2017年9月に開催した講座・ワークショップ「佐賀県の文化芸術情報を伝える」で文化芸術情報ポータルサイトのアイデアを交換し、その後有志のメンバーで自主ミーティングを重ねた。サイト名の「potari」(ぼたり)は、この自主ミーティングで発案されたものだ。

2018年度は、ポータルサイトの試験開設を目標に掲げ、公募で集まった社会人・学生15名の編集部員で活動をはじめた。

6月は、メンバーが集まる初回のミーティングで、全員の自己紹介からはじまった。笠井優さんが、九州・山口のアート情報サイト「アルトネ」の運営体制やユーザー層、コンテンツの量や更新頻度など、サイト運営の実態を紹介。その後、全員でふだん利用している情報サイトについて意見交換した。

7月は、牛島清豪さんが、自身が携わった地域メディアづくりの事例を紹介。佐賀市の市民ライターが各校区の情報を伝えるサイト「つながるさがし」など、地域住民を巻きこんだ活動の実例が示された。企画のコツやアイデアの練り方のアドバイスもいただく。後半は、「potari」をどんなメディアに育てたいか、アイデアを描いて発表した。奇抜なアイデアも飛び出し、軽快な雰囲気。

8月は講座はなかったが、自主ミーティングが開催された。編集部のコミュニケーションツールSlackの使い

方を学んだ。また「potari」のロゴを、学生メンバーが制作した案のなかから、編集部員の投票で決めた。

9月は、杉本達應が、サイトのコンテンツ更新の方法を解説。編集部員が各自でログインし手を動かしながら体験した。この日は構築中のサイトのレイアウトや色合い、カテゴリなどを検討した。

10月と11月は、高橋聡太さんによる記事執筆の実践トレーニング。基本的な記事の書き方や公開までのステップを学んで、各自で関心あるテーマでレポート記事作成に挑戦した。全員の原稿は、講師による添削を経てブラッシュアップ。執筆の難しさと批評の醍醐味を体験した。この講座で完成した記事は、「potari」に順次公開されている。講座後は懇親会を開催し、講師、編集部員間の親睦を深めた。

2018年12月、ついに「potari」がプレオープン(試験開設)。SMAART主催の講座は終了しているが、12月以降も毎月自主ミーティングが続いている。最終ロゴやフライヤー、広報紙の制作では、グラフィックデザイナー江副哲哉さんの協力を得ながら進めている。

今年度はサイト開設の準備を進め、運営のスタートポイントに立つことができた。運営体制はまだ十分ではないが、大きな反響をいただき期待を寄せられている。編集部員は、サイトの本格運営に向け真剣かつ楽しく活動を続けている。(杉本)

編集部員の構成

年代	
10代	1名
20代	5名
30代	4名
40代	3名
50代	1名
60代以上	1名
計	15名

職業	
公務員	2名
会社員	2名
Web関係	1名
PCインストラクター	1名
自営業	1名
主婦	1名
大学生	6名
他	1名

編集部員の声

今も仕事で広報を担当しておりますが、新聞社で毎日のように記事を書いていたころからすると、3年弱ではありますが、新聞社と真逆に近い役所ではプレスリリースを出す方になり、書き方や表現方法も変わり、たまにミックスになりそうになります。講座事態には仕事が重なり、トレーニング講座には1回しか伺えませんでした。一つひとつ高橋さんや杉本さんにお聞きしながら、整理して執筆する時間を楽しました。書いたり、発信すること、魅力を伝えることは好きなので、仕事ではない状態で、続けられるという喜びを噛みしめながら、講座、課題に向き合うことができました。とても実り多く、これからも続けてライフワークに出来たらと感じております。ありがとうございました。

書く側、読む側の立場、その他配慮など気に留めることが実は多いんだと気づかされた。

これから開催されるものではなく、現在行われているものに実際に参加し、自分の体験を伝えることが大切なことが分かりました。

一年間の記者修行～ぼたりすとの感想～

「佐賀のアート情報サイトを一から作る」というのは、とても大きいプロジェクトだと思っていました。ですが、いざ始まってみると、第1回のミーティングから受講生の方々と和気藹々とした雰囲気、サイトの名前やコンセプト、など意見交換しながら進めることができました。

potariのロゴを発案させてもらい、さらにそれをデザイナーさんがブラッシュアップしてくださったり、記事執筆トレーニングでは、ライターとしても活動されている講師の高橋さんに実際に自分が書いた文章を細かく添削していただいたりと、プロの方々とお話しする機会もあり、大変貴重なご意見をたくさん吸収することができました。

一年を通して、ミーティングやトレーニングを重ねてきましたが、「ぼたりすと」としての活動は始まったばかりです。これからも、たくさんのイベント情報の共有と、展覧会やワークショップへ参加した際のログを残していきたいと思います。(三村郁未)

PROJECT MEMBER'S Essay

アート情報で地域の人びとをつなぐ potariについての覚え書き 杉本達應



2018年度、地域のアート情報とレポート記事を掲載する文化芸術ポータルサイト「potari」(ぼたり)が無事プレオープンした。市民・学生からなる「ぼたり編集部」がこのサイトを運営し、わたしも手伝っている。そのなかで気がついたことと、potariが目指すところを書きとめておく。

すぐに気がついたことは、日々、各地で数多くのアートイベントが開催されていることだ。ところが開催数の多さに比べ、情報の流通量は圧倒的に足りない。とくに小規模な展覧会では情報の流れが滞っていて、潜在的な関心層に届かずに見逃されている。小さな展示こそ作家と鑑賞者など人と人がつながる機会があるのに、人の輪がひろがらず内輪で終わっているようにみえる。

滞った情報の流れをスムーズにするには、仲介者であるメディアの工夫も必要だが、主催者側も積極的に情報を発信していかなければならない。なぜなら展示は、広く一般に開いて他者に問いかけるパブリックな営みだからだ。発表するだけでなく、外部からの批評を受けとることで、はじめて豊かな文化がはぐくまれる。

こうした現状をにらみつつ、potariはつぎの2つのことを意識して運営にあたっている。

ひとつは、情報収集と発信の範囲だ。

新聞やテレビなど既存メディアは、特定の行政区域内のエリアの情報を、そのエリア内に発信している。これは実にもったいない状況だ。芸術文化は地域の境界をたやすく超える。多くの隣県に接する佐賀県は、九州一円に出かけやすい場所だ。そこでpotariでは、町や県の境界で制約せずに広い範囲の情報を扱うようにしている。結果として、佐賀にいる人びとだけでなく、ひろく周辺住民にとっても便利な情報サイトになった。

もうひとつは、情報の寿命だ。

既存のメディアやソーシャルメディアは、いままぐ知りたいニーズにこたえてくれる。しかし流れてくる情報は短命で、意外なほどあっさり消えてしまう。これだけでは、あとから情報を振りかえることが困難だ。potariではイベントが終了しても、その記録を蓄積していく。将来、過去の情報を調べたいときにきっと役立つはずだ。

potariを長期的に運営できれば、他にないユニークな地域のアートイベントや批評に関するデジタルアーカイブとなるだろう。もちろん今は構想でしかない。とはいえ、千里の道も一歩からだ。実現させるために、いまはこつこつとサイトを充実させる日々なのである。



この度も大変お世話になりました

2018年度のSMAARTも大変多くの力に支えられた一年となりました。

錚々たる講師陣。各講座では大変興味深い内容で熱心にレクチャーを頂きました。おかげさまで充実した講座内容を受講生へ届けることができました。改めて感謝いたします。

SMAARTスタッフの思いをくみ取り素敵なデザインを提供していただいたデザイナーさん、おかげさまで沢山のの方にSMAARTを届けることができました。

受講生募集チラシをはじめ数々の広報物の設置、広報宣伝活動にご協力いただいた各施設、店舗のみなさま、おかげで沢山のの方にSMAARTを知っていただくことができました。

利用しやすく、見やすく公式ウェブサイト及びポータルサイト「ぼたり」を開設に導いていただいたみなさま、度重なる注文に最後までお付き合いいただきありがとうございました。

取材をしていただきSMAARTの活動を紹介していただいた各メディアのみなさま、自らの活動が記事や映像、また耳からも伝わってくる感覚はくすぐったくもあり誇らしくもありました。ありがとうございます。

講座を開催するにあたり、快く会場提供していただいた地域、大学内他学部のみなさま、おかげさまで雨風をしのび暑さ寒さを気にすることなく快適な環境で講座を開催することができました。プログラムの撮影を行ってくださったカメラマンさん、おかげ

さまで、場の空気を切り取り取り温度を感じられるような一枚を記録として残すことができました。

常に事務局の縁の下の力持ちとなっていたいただいた芸術地域デザイン学部総務のみなさま、有田キャンパスのみなさま、学生アルバイトのみなさま、いつも無理難題と一緒に立ち向かっていただき大変心強くなりました。ありがとうございます。

お茶の木を提供していただいた佐賀県茶業試験場のみなさま、プロジェクトの相談に始まり、茶葉の提供（茶摘み体験まで）、製茶のアドバイス、お茶の木の提供に至るまで本当にありがとうございました。お茶の木があったからこそSMAARTAIRを成功に導くことができました。そしていつもおいしいお茶と笑顔で迎えていただいたこと嬉しかったです。今も、事務局に持ち帰ったお茶の枝は花を咲かせ続けています。

最後に、本年度のSMAARTにご参加いただきました受講生のみなさま、一年間お付き合いいただきありがとうございました。みなさまがこの佐賀の地で学びえたものを今後も繋いでくださいますように。

2019年度は締めくくりに年として、少しでもみなさまの思いに近づけるよう進んでいきたいと思えます。

2019年3月 白いお茶の花を眺めながら

事務局 緒方和子 吉村美歩

(イラスト・文/事務局)



広報資料



受講生募集チラシ

デザイン: マツダヒロチカデザイン事務所



公式ウェブサイト

<https://sma.art.saga-u.ac.jp>

サイト構築: 株式会社ローカルメディアラボ



フォーラム参加者募集チラシ

デザイン: マツダヒロチカデザイン事務所



スペース見学

参加者募集チラシ

デザイン: SMAART事務局



有田町民公開講座

受講生募集チラシ

デザイン: SMAART事務局



文化庁中間報告会用

ポスター

デザイン: SMAART事務局



SMAART AIR

プロジェクト説明会チラシ

デザイン: SMAART事務局



SMAART AIR

イベント告知チラシ

デザイン: SMAART事務局

新聞

- 2018年 5月23日(水) 佐賀新聞 告知記事
「ポータルサイト編集部メンバー募集」「アートマネジメント人材育成講座」
- 2018年 6月 5日(火) 佐賀新聞
「アートマネジメントの知識を 佐賀大「SMAART」第2弾
参加募集 地域との関わり、法律も」
(花木美美)
- 2018年 7月28日(金) 西日本新聞 告知記事
「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート(SMAART)
フォーラム「茶・藝・道 -売茶翁と現代ストリート文化-」
- 2018年 8月 7日(火) 佐賀新聞
「売茶翁の思想 現代に 18日、佐賀大 フォーラムでヒント探る」
(花木美美)
- 2018年 8月16日(木) 朝日新聞 告知記事
「フォーラム茶・藝・道 -売茶翁と現代ストリート文化-」
- 2018年 7月 2日(月) 佐賀新聞
「地域のアート発見、発信 佐大 マネジメントセミナー」
(山内克也)
- 2018年 9月 5日(水) 佐賀新聞
「文化資源活用のまちづくり紹介 佐賀大有田キャンパス 15日に公開講座」
(古賀真理子)
- 2018年 9月18日(火) 佐賀新聞
「「芸術薫るまち」公開講座で紹介 佐大有田キャンパス」
(古賀真理子)
- 2018年10月26日(金) 佐賀新聞
「美術家目線の運営を SMAART講座 川崎泰史さん講演」
(花木美美)
- 2018年12月14日(金) 佐賀新聞
「美術ユニット・オレクトロニカ あすから「茶の屋台」 中心街に非日常提案」
(花木美美)
- 2019年2月6日(水) 西日本新聞
「九州のアート情報 ウェブで発信」
(佐々木直樹)

ラジオ

- 2018年8月11日(土) NBCラジオ佐賀
19:30~20:00
「富永ボンドのRADIOボンドバ」
花田准教授出演

テレビ

- 2018年12月21日(金) NHK佐賀放送局
18:16~18:25
「ニュース ただいま佐賀」 「アートと共々町へ出よう」

Web

- 2018年5月25日(金) ARTNE(アルトネ) 告知記事
「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アートの受講生募集」
<https://artne.jp/news/368> (2019年2月8日アクセス)
- 2018年7月12日(木) ARTNE(アルトネ) 告知記事
「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート(SMAART)
フォーラム「茶・藝・道 -売茶翁と現代ストリート文化-」」
<https://artne.jp/event/676> (2019年2月8日アクセス)
- 2019年1月10日(木) 佐賀経済新聞
「佐賀大学芸術地域デザイン学部がアート情報サイト「potari」開設へ」
<https://saga.keizai.biz/headline/543/> (2019年1月28日アクセス)

森司

(アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長)



撮影:Kazue Kawase

1960年愛知県生。公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。「東京アートポイント計画」の立ち上げから関わり、ディレクターとしてNPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営や、人材育成・研究開発事業「Tokyo Art Research Lab」を手がける。

山下里加

(京都造形芸術大学アートプロデュース学科教授、アートジャーナリスト)



京都教育大学卒業。大阪市立大学大学院創造都市研究科修了。アートと地域、まちづくり、ひとづくりとの関係を主に取材、研究し、専門雑誌『地域創造』を中心に発表。大阪アーツカウンシル専門委員(2018年3月まで)、高槻市、豊中市、奈良市の文化振興会議委員を務める。

鷺尾和彦

(株式会社博報堂クリエイティブ・プロデューサー、
「生活圏2050」プロジェクトリーダー)



戦略プランニング、クリエイティブ・ディレクション、文化事業の領域で、数多くの企業や地方自治体や産業界とのプロジェクトに従事。近著は『アルスエレクトロニカの挑戦～なぜオーストリアの地方都市で行われるアートフェスティバルに、世界中から人々が集まるのか』(学芸出版社)。

菊池一夫

(明治大学商学部教授)



東京都在住。2001年から愛媛県松山市にある松山大学経営学部勤務し、商店街や街づくりの調査研究を行ってきた。2009年から東京の明治大学商学部で奉職し、商店街の姿をこれまでとは別の角度からとらえて活性化のヒントとして考えている。

佐々木保幸

(関西大学経済学部教授)



1965年京都府宇治市生。現在、関西大学経済学部教授、大阪府枚方市在住。主に大型店出店政策や商店街振興政策を中心に、日本とフランスの流通について研究を進めている。フランスでの在外研究では、小売業者や職人を大切に政策や風土を学ぶ一方で、豊富な食文化についても経験できた。

作田知樹

(Arts and Law ファウンダー)



行政書士。編集者。企画・コーディネート・法務・知財・組織管理が専門。アートに関する政策や表現規制の記録にも従事。著書に『クリエイターのためのアートマネジメントー常識と法律』。共著に『美術の日本近現代史ー制度 言説 造型』など。

端山聡子

(横浜美術館 主任エデュケーター/主任学芸員)



美術館を中心にさまざまなテーマによるワークショップや長期プログラムの実践を通して利用者の学びの可能性を探求し、その中からいくつかの自主企画展を企画した。現在の主な関心事は社会の中における美術館の在り方や、地域の文化資源と美術館・博物館の関係。共著に『博物館教育論』など。

錦織亮介

(福岡市美術館館長)



1943年生。北九州市立大学名誉教授。仏教絵画を学ぶが、特に江戸時代に長崎にもたらされた黄檗宗にかかわる絵画に興味をもち調べている。長崎にもたらされた中国明清の絵画とその影響と言ってもよいかもしれない。

狩野博幸

(美術史家)



1947年福岡県生。九州大学大学院文学研究科博士課程中退。帝塚山大学助教授を経て京都国立博物館研究官。美術室長・京都文化資料研究センター長、同志社大学文化情報学部教授を経て現在に至る。著者に『伊藤若冲大全』、『若冲』、『江戸絵画の不都合な真実』ほか。

木村勝彦

(長崎国際大学副学長 人間社会学部教授)



1957年長崎市生。筑波大学第一学群人文社会学部哲学専攻卒業。同大学院哲学・思想研究科宗教学・比較思想学専攻修了。博士(文学)。専門分野は宗教学、宗教思想史。平戸松浦藩に継承されてきた鎮信流茶道の歴史と思想についても研究を進めている。

毛利嘉孝

(東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授)



1963年生。社会学者。専門はメディア/文化研究。特に現代美術や音楽、メディアなど現代文化と都市空間の編成や社会運動をテーマに批評活動を行う。主著に『ストリート思想』、『ポピュラー音楽と資本主義』など。

オレクトロニカ

(美術ユニット/加藤亮+児玉順平)



「制作と生活」をテーマに活動を展開。展覧会のみならず、空間デザインやギャラリー・アートプロジェクトの運営などを行う。多種多様に变化していく様々なすき間を埋めるため、表現の手法にとらわれず活動する。

笠井優

(西日本新聞社企画事業室事業部/西日本新聞イベントサービス)



1986年徳島県生。九州大学芸術工学府修士課程修了のち博物館学芸員資格取得。2009～2016年三菱地所アルティウムにて展覧会企画・運営を担当。2016年～現職にて文化事業やアート情報サイトARTNEを担当。九州大学芸術工学部非常勤講師。

牛島清豪

(株式会社ローカルメディアラボ代表取締役)



1969年鳥栖市生。佐賀市在住。熊本大学文学部卒(日本民俗学専攻)。1994年佐賀新聞社入社。営業、経営企画等の部署を経て、デジタルメディア部門で活動。新聞社初のSNS導入や消費者参加型広告等を企画。2010年に起業し、次世代地域メディアのプランニング、地域情報化の分野で活動している。

杉本達應

(佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授)



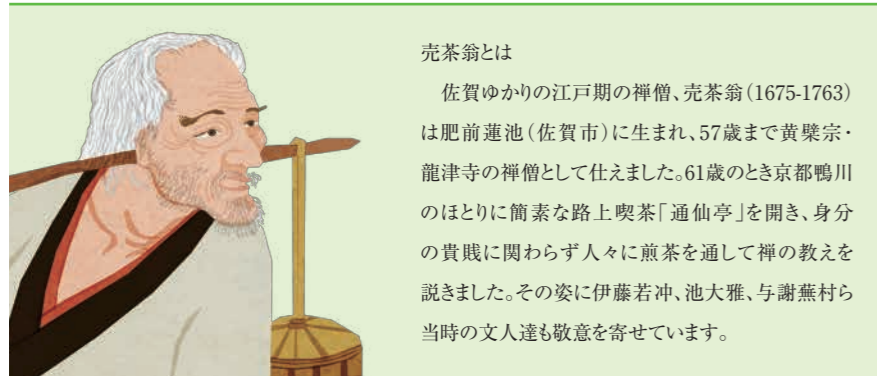
1975年熊本県生。佐賀市在住。佐賀大学教育学部卒(日本民俗学専攻)。岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー卒業。東京大学大学院学際情報学府博士課程単位取得退学。デジタルコンテンツ・デザイン、メディアアート、ワークショップデザイン、メディア研究などの複数領域で活動中。

高橋聡太

(福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科講師)



ポピュラー音楽を中心に20世紀の環太平洋圏の文化史を研究する。学部生時代より音楽サイトやテレビ誌にて執筆と編集を担当。最近の寄稿媒体に『ユリイカ』、『カルチャープレス』など。2016年より現職。



売茶翁とは

佐賀ゆかりの江戸期の禅僧、売茶翁(1675-1763)は肥前蓮池(佐賀市)に生まれ、57歳まで黄檗宗・龍津寺の禅僧として仕えました。61歳のとき京都鴨川のとりに簡素な路上喫茶「通仙亭」を開き、身分の貴賤に関わらず人々に煎茶を通して禅の教えを説きました。その姿に伊藤若冲、池大雅、与謝蕪村ら当時の文人達も敬意を寄せています。

平成30年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業

「芸術を通じた地域創生人材の育成～佐賀の地域資源をめぐるアートカフェとネットワークづくり」

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート (SMAART)

主催：佐賀大学芸術地域デザイン学部

協力：佐賀県、公益財団法人 佐賀市文化振興財団、文化経済学会九州部会

後援：佐賀新聞社、サガテレビ、西日本新聞社

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局 平成30年度企画運営スタッフ

小坂 智子 (芸術地域デザイン学部 教授)

花田 伸一 (芸術地域デザイン学部 准教授)

西島 博樹 (芸術地域デザイン学部 教授)

杉本 達應 (芸術地域デザイン学部 准教授)

緒方 和子 (企画運営スタッフ)

吉村 美歩 (企画運営スタッフ)

芸術地域デザイン学部総務

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート記録集 2018

発行日：2019年3月1日

編集：佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局

写真：長野聡史 (担当：フォーラム / SMAART AIR)

デザイン：マツダヒロチカデザイン事務所

発行：佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局

佐賀大学 芸術地域デザイン学部 〒840-8502 佐賀市本庄町1番地

TEL：0952-28-8309

<https://sma.art.saga-u.ac.jp/>